

今週の News

1. 緊急事態宣言下での事務局運営
2. 全まち 2020-2021 分科会の案内 (大槌、気仙沼)
3. 地域主体のまちづくり出前講座の実施
4. J's Cafe Hokkaido 2020 「地域の拠点」の開催

■緊急事態宣言下での事務局運営

新型コロナ (COVID-19) 対策として1月9日~2月7日の期間を対象として緊急事態宣言が発令されました。これに対応して、本部事務局では1月12日より一部在宅勤務・時差通勤を実施しています。期間中も業務は通常通り行いますが連絡などはメールでお願いいたします。

■全まち 2020-2021 分科会の案内 (大槌、気仙沼)

全まち 2020-2021 の第2回大槌分科会、第3回気仙沼分科会を開催します。オンラインでぜひ参加して下さい。

①第2回：大槌分科会

開催日時：1月30日(土) 13:00~16:30

開催場所等：大槌町文化交流センター、オンライン配信

プログラム：3つのセッションを中心に

②第3回：気仙沼分科会

開催日時：2月27日(土) 13:00~17:00

開催場所等：気仙沼市 Pier 7、オンライン配信

テーマ：震災から10年 ~気仙沼のまちづくりの土台と復興、その先にあるもの~

■JSURP 地域主体のまちづくり出前講座の中間報告

JSURP では地域主体のまちづくりを推進するため、まちづくりに取り組みたい地域団体、自治体職員向けに出前講座を実施しています。

要望されたテーマに合わせて講師を派遣するプログラムで、講師はまちづくりの実体験をレクチャーします。地域団体向けは3回の連続講座、自治体職員向けは1回の講座を基本としています。

今年度は、公募により6地域団体、5自治体を選定し事業を進めています。このうち2つの事例を報告します。

●(仮称)ジブリの里:農と食のまちづくり(地域向け)

現在、愛・地球博の会場跡地でジブリパーク整備中であり、その周辺に相応しい田園的景観維持=都市農地の活性化による地域整備/振興策の展開が望まれています。

前半は小谷俊哉氏((一財)都市農地活用センター)、小野淳

「JSURP Newsβ版」の試み

JSURP の多様な活動の「予告・案内」と「結果」を迅速に会員相互で共有することを目的として JSURP Newsβ版を試行します。月2回発行予定
編集：渡会、中川、千葉、小谷

氏(株野農天気 (NPO) くにたち農園の会)からのレクチャーを受け、後半は都市農地の所有者、新規農業参入者、市民等が議論し、各自が的確な活動につなげるとともに連携して共通課題の解決方策を検討しました。



●山口県山口市(自治体職員向け)

前半は園田聡氏(日本都市計画家協会理事)、木藤亮太氏(株式会社ホーホウ代表取締役/株式会社油津応援団専務取締役/株式会社バトンタッチ代表取締役)、宋俊煥氏(山口大学大学院創成科学研究科 准教授)からのレクチャーを受け、後半は6つのグループに分かれて、山口市の現状を踏まえて地域主体のまちづくりの推進について、参加職員同士で意見交換ワークショップ、講師とのディスカッションを行いました。



年度末に向けて、予定された地区で残りのプログラムを実施していきます。

■J's Cafe Hokkaido 2020 「地域の拠点」

日本都市計画家協会北海道支部
J's Café HOKKAIDO 2020①

- 地域の拠点 -

2020年12月10日 (木) 18:30~



12月10日 (木) 18時30分から、J's Café Hokkaido 2020「地域の拠点」をオンラインにて実施しました。今回は、北海道東川町のまちづくりに長く関わっておられる北海道大学大学院工学研究院の小篠隆生准教授をゲストにお迎えし、東川町における地域のコミュニティ拠点形成のための連鎖・創造的公共施設の再編をテーマに話題提供いただき、参加者の方々とディスカッションしました。

また、今回は「地域活動部会」との連携開催ということもあり、道外からもご参加いただき、合計35名(J's Café Hokkaidoとしては最大人数！)の方にご参加いただきました。

①話題提供



小篠先生から、話題提供の導入として、地域の拠点を議論する上では「コミュニティ的視点」と「公共的視点」をハイブリッドし、地域の拠点を含めた地域のデザインをすることが重要である、とのご指摘がありました。加えて、イタリアトリノ市における『地区の家』を事例に、地域課題の広がりや自主的に解決するために地域が自ら事業化する「地域自主組織」構築の重要性についてお話がありました。

その後、『東川スタイル』という東川独自のまちづくりを支える、適疎な都市空間とコミュニティのつながりを醸成する上での総合連関的施策展開と、連鎖的公共施設再編の考え方についてお話があり、その実践として「東川小学校+地域交流センター」と「せんとぴゅあⅠ・Ⅱ」の拠点づくりにおける理念と空間形成のお話、さらに多様な人材がキャストとなり、能動的に活動するための拠点運営の仕組みや活動例のお話がありました。

これらの事例を通じて、拠点形成という個別な取組と都市・地域全体を考えることの連関した計画づくりの必要性についてご提言をいただきました。

②拠点づくりに関わった方とのディスカッション

「東川小学校+地域交流センター」と「せんとぴゅあⅠ・Ⅱ」の拠点づくりに関わった参加者の方にも、インタビュー形式でお話を伺いました。

○コンサルタント…拠点形成に携わったことをきっかけに、実際に東川町への移住を果たし、体感した東川暮らしの魅力と二地域居住の可能性について

○家具デザイナー…これまでの東川町との関わりや、その中で感じるまちの特性について

③質疑応答



Q 行政、学校、専門家による検討体制構築の経緯は？

A 様々な人のネットワークを、オフィシャルではないところで創り上げていった。そのつながりが、様々な活動を生み出している。

Q 定例化している運営企画会議の構成とは？

A 施設活用に携わっている人であれば誰でも参加できるオープンな場となっている。みんなで考えていることが、様々なアイデアを生む土壌となっている。

Q せんとぴゅあ周辺へのデザインや活動の波及効果への計画的関わりとは？

A 産業振興や定住促進の施策が平行に動いているが、せんとぴゅあとの連関が生まれることで、市街地内に回遊性を生み出し、まちの使い方を変える効果がある。

Q アフターコロナ、SDGs、Society5.0を視野に入れたまちづくりの変化の可能性は？

A 地域の拠点には、人が集まれる場所を提供するという役割がある。リアルに人と人との交流ができる環境をつくっていく動きは変わらないだろうと思う。

■今月後半の予定

- ①1月22日(金) 第185回理事会
- ②1月29日(金) 研究会協議会
- ③1月30日(土) 全まち2020-2021大槌分科会